

(本文より)

——シトー会の修道女であったヘルフタの聖ゲルトルドは、祈りの中でキリストのみ心に自分の頭をもたせかけ、その鼓動を聞いたという体験を語っています。

——シエナの聖カタリナは、主が耐えられた数々の苦しみを今直接見ることはできないと認めつつも、開かれたみ心においてこそ、キリストとの愛に満ちた人格的な出会いをもつことができると記しています。

——近代においてこの信心に大きく貢献したのが、聖フランシスコ・サレジオです。彼はたびたび、キリストの開かれたみ心について黙想し、キリストとの愛に満ちた人格的な交わりの中で、そのみ心のうちに住まうという招きを感じていました。

——聖マルガリタ・マリア・アラコックは、一六七三年十二月末から一六七五年六月にかけて、重要なご出現を幾度も体験したと語っています。その中でもっとも重要なのは、最初の大いなるご出現において語られた愛の宣言です。

——聖クロード・ド・ラ・コロンビエールは聖マルガリタの体験を知ると、すぐにその擁護者となり、信心を広めていきました。彼は、イエスのみ心への信心を理解し広めるうえで、そしてこの信心を福音の光のもとで解釈するという点でも、特別な役割を果たしました。

——聖シャルル・ド・フーコーと幼いイエスの聖テレジアは、とくに意図したわけではありませんでした。結果としてキリストのみ心への信心がもついくつかの要素を新たなかたちで捉え直し、より福音に忠実なかたちでの理解に貢献することになりました。

——聖イグナツィオは、キリストの十字架のもとにたたずむ観想を締めくくるにあたり、十字架におられる主に深い愛情を向け、さらに「友が友に、あるいは召使いが主人に話すように」、主のために何をすべきかを主ご自身に問いかけるよう勧めています。

——キリストのみ心への信心は、それぞれ大きく異なる聖人の霊的歩みに見いだされます。そしてそれぞれにおいて、この信心の新たな見方が示されるのです。たとえば、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロは、神が求めておられるのは心であると語っています。

心とは何であるかを考察することから始め、イエスのみ心への信心について、福音書の記述と教導職の教えを再確認し、数多の聖人の信仰を具体的に示して、この信心がもつ共同体的・社会的・宣教的側面を深める必要性を説く。

LITTERAE ENCYCLICAE DILEXIT NOS



キリストの脇腹の傷からは、今もなお、一つの川があふれ続けています。この川は決して涸れることがなく、過ぎ去ることもなく、愛することを願う人すべてに繰り返し注がれています。

教皇フランシスコ 回勅 主はわたしたちを愛された

四六判上製 208 頁 定価 (本体 1100 円 + 税) ISBN978-4-87750-258-4